

時代を映す調査内容の変遷 — 統計の深読みで知ったこと 4 —

立山千草 本間伸夫

“数字を追うな統計を読め”⁽¹⁾という書籍があるが、そのタイトル通りだと思う。“統計を読め”ということは、数値を得るのが統計の最終目的ではなく、それをいかに読み解き、生かすかが目的であるべきことを意味している。ここでは政府統計情報データについて、数字から離れて身近な食生活の変化を辿ってみることにした。

深読みの対象は、例によって家計調査年報の食料品目の部門である。家計調査の歴史⁽²⁾は、1916（大正5）年に高野岩三郎を主宰として近代的家計調査が初めて行われ、1926（大正15）年に内閣統計局が全国規模で家計調査を実施、戦後は1946（昭和21）年「消費者価格調査」に始まり、1953年に現在の「家計調査」の姿になり、国の重要統計の一つとして基幹統計に指定されている。総務省統計局作成であるので、いわゆる省益などに影響されていないことが、この統計の大きな特長となっている。

家計調査の収支項目分類は、国民生活における家計収支の動向を的確に把握するため、近年の消費実態を勘案して定期的に見直しを行っている。家計調査年報⁽³⁾を年次で追ってみると、調査項目についての分割、統合、名称変更、追加、廃止がかなり認められる。このことは、統計の継続性からすると好ましいことではないが、食生活そのものの著しい変化に対応せざるを得ないためと推察される。

これらのことから、調査項目の変遷はそれぞれの時代の食生活の状態を反映しているものと考えられる。以下、項目の変遷とその背景について検討した結果について述べる。

1. 家計調査・収支項目（品目）分類の変遷

— 家庭食の外部化、調理食品の台頭

品目数が膨大となるので、全体像を把握するため、食料品目分類のうち、「中分類」群別（以下、食群別）にまとめて検討した。何しろ戦後の混乱期を承けての60年以

上の経過であるので、調査結果の数値の変化が大であることは当然として、調査項目分類にも大きな変化があることが予想される。やはり、表1の項目数から分かるように、かなり変化が起きていることが認められる。

今日の食生活から受ける感覚からすると、食料品店に並ぶ豊かな食材、多彩な外食店、溢れるばかりの食に関する情報などから、何となく調査項目数もかなり増えているのではと思う。しかしながら、実際の調査項目数は250前後に落ち着いている。その理由として、まずは、元来、項目数は変わっていないのかもしれない。家計調査対象の世帯構造別世帯数の比率変化から、調査協力世帯の負担を考慮して項目数の増加を抑制しているのかもしれない。あるいは、予算には限りがあるので費用が抑制されていることも考えられる。

表1の1963（昭和38）年はかなり特異的であって、総項目数が少ないだけでなく、その項目名を一瞥するかぎり、まだまだモノのまずしさが感じられる。項目数の変化から判断すると、昭和50年台頃になると内容は今と異なってくるものの、それ相応のモノの豊かさを持っており、平成になってからは大きな変化がなく落ち着いているように見受けられる。

食群別に見ると、目を惹くのは「調理食品」群の項目数の増え方である。家庭の食の外部化、いわゆる中食（なかしょく、ちゅうしょく）が見て取れる。この言葉は働く女性やコンビニエンスストアが社会に定着した1980年代ごろから登場している⁽⁴⁾。本来の「外食」群の項目はあまり変わっていないが、それでも1963（昭和38）年との間にギャップが認められる。「飲料」群の項目数の増加は、嗜好品として、果実・炭酸飲料に加えて、缶コーヒーやスポーツドリンク、ウーロン茶飲料など、新分野飲料と呼ばれる新しいカテゴリーが増加しているためであろう。なお、全国清涼飲料工業会「清涼飲料の50年」⁽⁵⁾によると、昭和30年代半ばから、炭酸飲料、果実飲料両群の需要拡大が本格化し、1961（昭和36）年にはコーラ飲料の本格発売が開始されている。

逆に、殆どが増加または変動が少ない中で、「穀類」群の項目数の減少が目される。これには、米関連の減少

たてやま ちぐさ
〒950-0813 新潟市東区海老ヶ瀬471 新潟県立大学
ほんま のぶお
〒950-0813 新潟市東区大形本町2-3-28（自宅）

表1 家計調査・食料品目・食群別の調査項目数の変遷

調査年	総数	穀類	米類	魚介類	肉乳卵	野菜海藻	果物	油脂調味料	調味料	菓子	調理食品	飲料	酒類	清酒	外食
1963 (s38)	199	29	12	44	19	54	11	16	13	18	5	8	11	4	5
1972 (s47)	242	28	11	46	18	52	16	17	15	19	6	10	11	4	12
1978 (s53)	238	23	7	46	18	53	16	17	15	19	6	10	11	4	12
1985 (s60)	268	22	7	49	25	57	20	19	15	21	18	13	12	3	12
1993 (h5)	255	17	3	52	21	55	22	21	17	16	20	10	8	1	13
1999 (h11)	253	17	3	48	21	54	22	21	17	16	20	11	8	1	13
2010 (h22)	252	17	1	43	21	53	18	21	17	17	20	17	8	1	15

注1：米、調味料、清酒はそれぞれ穀類、油脂調味料、酒類の各食群別から抽出したもの。

注2：調査年のsは昭和年、hは平成年を表す。

が強く影響している。

魚介類、肉類、乳卵類、野菜、果物群など、生鮮物が中心となる食群では概して項目数の変動が少ない。これは加工食品などに比べて新規食品の導入に時間を要するためと考えられる。

2. 米、揺らく主役の座

調査初期の頃の米関連の項目は表1に示したようになり多い。その項目名は、例えば1963(昭和38)年調査の場合では、米関連をまとめる「米」群、「内地米(計)」、「内地米(配-計)」、「内地米(配-普通)」、「内地米(配-特選)」、「内地米(非)」、「徳用米」、「外米」、「もち米(計)」、「もち米(配)」、「もち米(非)」、「その他」の計12項目である。(非)とは、併記の英語で(no rationed)とあるので配給の員数外ということで、米穀通帳の必要な政府配給米ではない、いわゆる“闇米”に相当するのであろう。

戦後18年を経過しているにもかかわらず、計12項目という1963(昭和38)年の細かく分類した項目名から、政府は主食という立場の米の確保に頭を悩まし、国民もまたその入手に苦労していることを覗き知ることができる。しかし、配給内地米に“特選”があることは、やりくりで若干の余裕が出てきたことも教えてくれる。

1978(昭和53)年調査では、「米」群は「うるち米(計)」、「徳用上米」、「標準価格米」、「他のうるち米」、「もち米」、「その他」の計7項目に減っており、(非)や外米が無くなっている。なお、この頃は、第一次石油ショックなどがあり物価上昇が著しく、米価も例外でない。徳用米(：内地米として配給されている粳米4等以下の米)は、その対応策の一つであったのであろう。なお、政府配給米は1981(昭和56)年に廃止されたが、この頃はなお、米の役割は極めて重要であった。

1992(平成4)年以降は「米」1項目だけとなった。

関係する項目数が減ることは、その食群の比重が低下したと考えられる。家計調査³⁾の消費量の値によれば、穀類の中での米の割合は着実に減少しているのに対して、「食パン」と「麺類」群は増加している。米栽培に適している日本の風土から、パン類や麺類が米に取って代わることは考えたくないが、穀類としての米の比重の低下は避けられそうもない。

家計調査³⁾の消費量はまた、食群別の中での穀類全体の比重の低下傾向にあることと穀類としてのパンや麺類の伸びも頭打ちであることを示している。食料生産の増加が人口増加に追いつけない現状において、食生活における穀類の比重が下がるのは、エネルギーの生産性が安定して高いのは穀類であることから、得策とは考えられない。中食、外食における穀類食材の利用消費状況の推移も併せ見守っていく必要がある。

3. インスタント化の旗手、麺類

現在、インスタント食品は多数販売されているが、家計調査の項目にあるのは「即席麺」と「カップ麺」で麺類に限られており、即席麺と同じ頃の1960(昭和35)年に発売され始めたインスタントコーヒーは、未だ項目になっていない。

麺と同様、小麦のでんぷんを使用するパンは、インスタント食品に含まれないが、簡単かつ短時間の調理で食べられるように加工され、かつ、少々の保存性があるので、パンはほぼインスタントの条件を満たしている。麦粒から出発し、製粉からパン焼きまで幾つかの工程を経てできあがるため、でんぷんはα化されており、直ぐに食べられる。

一方、麺は製粉と製麺により麺状に整形され、そのまま或いは乾燥されてできあがる。加熱の工程がないので、でんぷんはα化されておらず直ぐには食べられない。麺類の市場は大きいので、そのインスタント化は魅力的

であったに違いない。その発明は日本においてであり、今日、各種即席麺類の消費は世界的になっている。任田耕一氏によると⁽⁶⁾、即席麺の販売開始は1958（昭和33）年、カップ麺は1971（昭和46）年であるという。項目としての即席麺は1965（昭和40）年から、カップ麺は遅く2005（平成17）年から記述がある。

なお、米飯は水分が多いので、でん粉が老化しやすく保存性、嗜好性の点からインスタント化は困難を極めていたが、近年、加工米飯（：冷凍米飯、無菌包装米飯、レトルト米飯、ほか）が、その利便性から年々生産量を増やしており、なかでも、家庭用としては1食分ごとにパックされている無菌包装米飯の増加が著しい⁽⁷⁾。水分の多い状態の保存を無菌包装の技術で克服し、 α 化を電子レンジに委ねることで成功したのが今日の無菌包装米飯であり、市場への出現は1987（昭和62）年頃からである⁽⁸⁾。その普及の見通しから、将来、新規の項目“包装米飯”が生まれるかも知れない。

4. 魚離れとともに消え去る魚介類

魚介類の項目は、変動が比較的少ないものの徐々に減少している。「たら」2000（平成12）年に他の鮮魚、「ひらめ」2000（平成12）年に他の鮮魚、「干いわし」2010（平成22）年に他の塩干し魚介に統合されて消え去っている。消え去った理由として漁獲量の減少、それに伴う価格の高騰があり、調理や保存の難しさも指摘できる。高く手間がかかるとなれば“魚離れ”も当然であり、整理される項目が出るのは必然である。

いずれにしても、家庭で口にすることができる魚種は限られ、決まりものばかりとなっている。反面、“地魚”として、その美味・珍味が尊重されている魚種が「他の鮮魚」に集まるといふ皮肉な事態も生まれている。

5. 薄味の食品、魚肉ソーセージ

ずっと続いてきた「魚肉ソーセージ」の項目は1995（平成7）年に「その他の水産練り製品」に統合されている。

この食品は誠に興味深い食品である。おおげさな表現であるが、戦後間もない物資貧困の時代を背景にして、アメリカの肉食文化と日本伝統の魚食文化とのドッキングという日本人が得意とする手法により1949（昭和24）年に誕生したものである。食肉文化へのささやかな憧れ、初めて接するスパイスの鮮烈な風味、栄養的、安価、簡便性などが相まって広く国民に受け入れられた。食料・農業・農村政策審議会畜産部会委員と加工・流通業者との意見交換会への提出資料7「食肉加工業界をめぐる事情」によると⁽⁹⁾、生産量が1972（昭和47）年に最大18万トンに達するほどであるが、その後かなりの早さで減少

している。消費量は、増加傾向にある肉ソーセージに対して魚ソーセージのそれは急減し、1977（昭和52）年頃に逆転し、殆ど忘れ去られようとしている。しかし、近年、健康食品的な意義もあって支持者は少なくなく、今日においても大きな食料品店で購入することができる。

6. 看板を下ろした懐かしの食品の数々

海産物の項目では、「鯨肉」1986（昭和61）年に他の生鮮肉、「魚介の塩辛」1995（平成7）年に他の魚介加工品その他、「するめ」1995（平成7）年に他の塩干し魚介に統合されて消えている。鯨肉は捕鯨制限の影響が大きく、するめは現代人咀嚼力や嚙下力の劣化も関係しているのかもしれない。

農産物では、「かぶ」2000（平成12）年に他の根菜、「小豆」1996（平成8）年に他の豆、「夏みかん」2000（平成12）年その他の柑きつ類に統合されている。菓子では、「あめ」1986（昭和61）年にキャラメルを統合したが2000（平成12）年キャンデーに名称変更、「チューインガム」1986（昭和61）年他の菓子へ統合、「コーラ」1986（昭和61）年に炭酸飲料へ統合されて項目から消えたものの例である。

万葉集にも登場しているという「かぶ」の消失は残念である。今でも、その季節ともなれば食料品店にかなりの量を見受けるからである。「小豆」は家庭内での利用が減ったことが理由と考えられる。ゆで小豆缶や赤飯、ぼた餅、汁粉など食べたいときに既製品を購入すれば用は足りる。「夏みかん」、「あめ」は類似競合品との交替と推定できる。チューインガム、コーラはおそらく、健康志向の高まり、ライフスタイルの変化から一頃の熱気が冷めたのであろう。

上記のいずれも店頭から消え去ったわけではない。しかし、古き時代を知る人にとっては、懐かしいものに違いない。

7. 格付けされたもの、清酒とウイスキー

酒税徴収のためであろうか、酒類はかなり細かく分類されている。それが影響してか調査項目も細かく区分された時代がある。1940（昭和15）年から1992（平成4）年まで、清酒類の項目は「1級」、「2級」、「特級」、「合成清酒」に分かれていた。合成清酒とは、アルコールにブドウ糖など諸々の成分を加えて製造し、その香味、色沢などの性状が清酒に類似しているものをさし、物資不足の象徴的存在であった。その合成清酒は、早々と1975（昭和50）年代半ばに消えたが、1、2級の区別は1992（平成4）年まで持続している。現在は「清酒」のみである。合成清酒の製造は継続されているものの激減しており、

表2 家計調査・食料品目・1967(昭和42)年以降に登場した主な食項目

食群	カタカナ表記 食項目(最初の記載年)	その他表記(カタカナ表記以外) 食項目(最初の記載年)	ノート
麺類	スパゲッティ(2000・h12),カップめん(2005・h17)	ゆでうどんそば(1969・s44),干しうどんそば,(1969・s44),即席めん(1969・s44),中華めん(1987・s62),生うどん・そば(2000・h12),乾うどん・そば(2000・h12),ほたて貝(1987・s62)	「スパゲッティ」は「ゆでうどん、そば、スパゲッティ」、「干しうどん、そば、スパゲッティ」1990(h2)年へ変更後、さらに「生めん・スパゲッティ」「干めん・スパゲッティ」1995(h7)年に変更した後、「スパゲッティ」2000(h12)年に分割。
魚介類	魚肉ソーセージ(1967・s42)	しらす干し(1968・s43),いかのくん製(1969・s44),魚介のつくだ煮(1958・s33),えび(1976・s51),かに(1976・s51),さしみ盛合わせ(1987・s62),ほたて貝(1987・s62),揚げかまぼこ(1995・h7)	「魚のハム・ソーセージ」1961(s36)年は、「魚肉ソーセージ」1967(s42)年に名称変更、その後「他の魚肉練製品」1995(h7)年に統合。「しらす干し」は1949(s24)年に「その他の塩干魚介類」に統合後、しらす干し1969(s44)年に復活。「いかのくん製」1969(s44)年は「魚介のくん製」1987(s62)年に名称変更後、「他の魚介加工品のその他」2000(h12)年に統合。「えび・かに」1967(s42)年は「えび」「かに」1980(s55)年に分割。「さつま揚げ」は「揚げかまぼこ」1995(h7)年へ名称変更。
肉乳卵類	チーズ(1961・s36),ヨーグルト(1985・s60)	合いびき肉(1985・s60),卵(1985・s60)	「鯨ベーコン」1949(s24)年は「その他の獣肉類」1985(s60)年に統合。「鶏卵」は「卵」1987(s62)年へ変更。
野菜海藻	ピーマン(1958・s33),レタス(1965・s40),カリフラワー(1965・s40),ブロッコリー(1990・h2)	もやし(1969・s44),たけのこ(1969・s44),生しいたけ(1969・s44),しめじ(2015・h27),えのきだけ(2015・h27)	カリフラワー1965(s40)年は、1987(s62)年に削除。ブロッコリー1990(h2)年に追加。
果物類	バナナ(1964・s40),レモン(1968・s44),メロン(1980・s55),オレンジ(1987・s62),キウイフルーツ(2005・h17)		「他の柑きつ類」1971(s46)年は「グレープフルーツ」「オレンジ」「他の柑きつ類」2000(s62)年に分割。
油脂調味料	乾燥スープ(1978・s53),マヨネーズ・マヨネーズ風調味料(2010・h22),ドレッシング(2010・h22)	風味調味料(1987・s62),ふりかけ(1987・s62),つゆ・たれ(1987・s62)	「スープの素」1969(s44)年は「乾燥スープ」1995(h7)年へ変更。「マヨネーズ」1961(s36)年は「マヨネーズ・ドレッシング」1980(s55)年に変更後、「マヨネーズ・マヨネーズ風調味料」と「ドレッシング」2010(h22)年に分割。
菓子類	キャンデー(1978・s53),ゼリー(2000・h12),プリン(2000・h12),チョコレート菓子(2005・h17)		「あめ」1953(s28)年は「キャンデー」1995(h7)年へ名称変更。「チョコレート」のほかに「チョコレート菓子」2005(h17)年追加。
調理食品	調理パン(1978・s53),そうざい材料セット(1980・s55),ハンバーグ(1987・s62)	うなぎかば焼き(1969・s44),しゅうまい(1978・s53),調理食品の缶詰(1980・s55),冷凍調理食品(1980・s55),ぎょうざ(1987・s62),やきとり(1987・s62),弁当(2000・h12),すし(弁当)(2000・h12),おにぎり・その他(2000・h12)	「他の主食的調理食品」1969(s44)年に追加。「弁当類」1980(s55)年に追加後、「弁当」「すし(弁当)」「おにぎり・その他」2000(h12)年に分割。「調理食品の缶詰」1980(s55)年は「他の調理食品のその他」1995(h17)年へ統合。
飲料	コーヒー(2000・h12),コーヒー飲料・(2000・h12),ココア・ココア飲料(2000・h12),ミネラルウォーター(2005・h17),スポーツドリンク(2005・h17)	炭酸飲料(1978・s53),茶飲料(2000・h12),乳飲料(2005・h17)	「コーヒー」1961(s36)年は、「コーヒー・ココア」1980(s55)年へ変更後、「コーヒー」「コーヒー飲料」「ココア・ココア飲料」1987(s62)年に分割。「コーラ」は炭酸飲料1985(s60)年へ統合。「ジュース」1958(s33)年は、「果実・野菜ジュース」2000(h12)年に名称変更。
酒類	発泡酒・ビール風アルコール飲料(2000・h12),チューハイカクテル(2000・h12),ワイン(2010・h22)		「ぶどう酒」1961(s36)年は、「ワイン」2010(h22)年に名称変更。
外食	ハンバーガー(2000・h12)	喫茶代(1970・s45),飲酒代(1970・s45),日本そば・うどん(1970・s45),中華そば(1970・s45),すし(外食)(1970・s45),他の主食的 外食(1977・s52),和食(2000・h12),洋食(2000・h12),中華食(2000・h12),焼肉(2015・h27)	「その他の外食費」1946(s21)年は「主食外食費」1951(s28)年へ変更後、「めん類外食」「その他主食外食」へ分割し、2015(h27)年には10項目に分割。

注1: 各枠中の食項目は最初の記載年順に記載している。

注2: 調査年のsは昭和年、hは平成年を表す。

覚えている人はごく僅かになっていることであろう。

ウイスキーもまた複雑で、古くは「ウイスキー」だけであったのが、途中から「1級」と「2級」、「輸入」と「国産」に分類されている。2005（平成17）年にウイスキーのみに戻り細かい分類はなくなっている。輸入と国産に分かれていた頃の消費者の国産ウイスキーに対する見方を窺い知ることができる。

項目に「発泡酒」が加わったのは2000（平成12）年であり、さらに2010（平成22）年にその名が「発泡酒・ビール風アルコール飲料」に変わっている。発泡アルコール飲料の新ジャンル続出に対して“風”で対応したという感じである。

8. 一貫して同一名を張り和食の伝統を守る加工品

家計調査項目は統合、名称変更、廃止が多くみられるので、一貫して同一食項目名を半世紀以上に亘ってその名を維持しているものは、かなり絞られる。

魚介の加工品の中から、そうしたものを拾ってみると「塩さけ」、「たらこ」などの塩物、「干しあじ」、「煮干し」などの干物、それに「さつま揚げ」、「竹輪」などの蒲鉾類と「かつお・けずり節」がある。野菜と海藻の加工品の中からは、「豆腐」、「納豆」、「こんにゃく」、「焼のり・干のり・干しのり」、「梅干し」、「白菜漬け」、「昆布佃煮」などがある。「大根漬け」は途中で「たくあん漬け」から名称変更したものであるがこの仲間に入る。

これらは少なくとも江戸時代まで遡る伝統食品であり、海産物、大豆、野菜を中心とする食品は、戦前までの和食の特質に深く関わっているものである。現在においても重要な食品として食料品店などの店頭を飾っている。

9. 近年、新たに登場した項目－近代化に関わるもの

外来語名は、その出自、伝承と結びついている。表2に、戦後、比較的落ち着いた1967（昭和42）年以降に、新たに項目となった主なものを、カタカナ表記とその他表記に分けて示した。また、各項目名称の経緯についても主な事柄をノート欄に記した。

2014（平成27）年におけるカタカナ表記は、「乾燥スープ」のように一部でもカタカナの入ったものも含めると、全項目数250前後の中で60項目を数える。油脂調味料、菓子類、調理食品の項目でカタカナ名の割合が突出しており、逆に、魚介類ではゼロである。今日の食生活の実態の一端を示しているといえる。なお、江戸時代の南蛮渡来（16世紀）のカステラなどは別として、カタカナ表記項目の多くはいわゆる文明開化前後（19世紀）か、それ以降に渡来または再渡来、あるいは和洋折衷で生まれた

ものである。表2に記載されていない「トマト」、「バナナ」、「ハム」、「ソーセージ」、「コロッケ」、「カツレット」などのカタカナ表記項目のほとんどはそれに相当する。

表2のカタカナ表記の項目で目につくものは、果物、調味料、菓子、飲料、酒類である。日本人の食生活の近代化や国際化はこれらの食品群を中心にして進められたことを示している。それに対して、穀類、魚介類、乳製品を除く肉卵類、野菜海藻類にカタカナ表記項目が少ない。これらの食品群には、和食の特質に関わる食品が多く含まれているものと考えられる。

外食関連項目の増加は外食化の実体を直接的に示しており、魚介類の加工品、調理食品と油脂調味料の項目の増加は家庭内食の外部化、すなわち中食がかなり進んでいることを強く示唆しているといえる。

参考文献

- (1) 佐藤朋彦:数字を追うな統計を読み、日本経済新聞出版社（2013）
- (2) 総務省統計局:家計調査のしくみと見方-家計調査の歴史-p 68-69（2005年）
<http://www.stat.go.jp/data/kakei/pdf/mikata00.pdf>
- (3) 総務省統計局:家計調査年報（家計収支編）刊行物:昭和38年（1963）～平成27年（2015）、統計局ホームページ:調査の概要、調査結果（結果の概要2000年～2015年度、用語解説、収支項目の分類）
<http://www.stat.go.jp/data/kakei/2.htm>
- (4) 公益社団法人米穀安定供給確保支援機構（米穀機構）情報部:米に関する調査レポートH26-4中食・外食の動向（No3 弁当給食事業者）p 3（2014）
- (5) 全国清涼飲料工業会:「清涼飲料の50年」p 12-13（2005）
- (6) 任田 耕一:「即席麺とでん粉」独立行政法人農畜産業振興機構（2011）
https://www.alic.go.jp/joho-d/joho08_000094.html
- (7) 公益社団法人米穀安定供給確保支援機構（米穀機構）情報部:米に関する調査レポートH26-1加工米飯の動向（No1 無菌包装米飯）p 4（2014）
- (8) 増田 敏郎:包装アーカイブス「無菌包装米飯」、日本包装学会誌 Vol.20 No.5 p 447-458（2011）
- (9) 食料・農業・農村政策審議会畜産部会委員と加工・流通業者との意見交換会配布資料:日本ハム・ソーセージ工業協同組合資料（食肉加工業界をめぐる事情）農林水産省、http://www.maff.go.jp/j/chikusan/kikaku/lin/pdf/07_ham_sausage_kougyou_kumiai.pdf